

国旗の由来は  
さまざま



『標準高等地図』

 <b>インドネシア共和国</b> 国語 東南アジア南東部の島嶼国。資源保有国で、農業もさかん。1980年代から製造業が急速に発展。 国旗 赤は自由と勇気を、白は正義と純潔を表す。また、同時に赤と白は太陽と月を表す。	 <b>リビア</b> 国語 1969年のクーデター以降、カダフィの独裁政権が続いたが、2011年に反政府デモが全土で勃発。数か月にわたる武力衝突を経て、カダフィ政権は崩壊した。 国旗 汎アラブ色にイスラームの象徴の三日月と星を配す。
 <b>ポーランド共和国</b> 国語 1980年代の「連帯」運動以来、東欧の民主化を牽引した。工業だけでなく農業もさかんである。 国旗 建国者が夕焼けの空を飛び白鷺を見て旗にしたという伝説がある。赤は独立と国のために流された血、白は喜びを表す。	 <b>フランス共和国</b> 国語 工業だけでなく、農業でもEU最大規模。国連安理常任理事国であり、政治的にも重要な地位を占める。 国旗 青・白・赤は自由・平等・博愛のシンボル。ブルボン王家の色に白に、パリ市の色を青と赤を加えたフランス革命時の帽章に由来。
 <b>オーストリア共和国</b> 国語 1955年、永世中立を宣言。首都ウィーンは古くから国際外交の舞台で、国際原子力機関 (IAEA) などの国際機関が本部を置く。 国旗 オーストリア大公シオボルド5世の十字軍遠征の際、白い軍旗が敵の返り血で赤く染まり、ベルトの跡だけ白く残ったという伝説に基づく。	 <b>ロシア連邦</b> 国語 1991年ソ連崩壊。旧構成国の独立後も世界最大の国土面積をもつ。石油、天然ガスなど資源も豊富にある。近年、経済成長が進んだ。 国旗 ソ連解体時に、鎌とハンマーの赤旗から帝政時代の旗に戻った。オランダの国旗に感激したピョートル大帝が色を並べかえてつくったといわれる。
 <b>バングラデシュ人民共和国</b> 国語 東パキスタンが1971年独立。米、ジャートが主要作物。繊維産業が成長。衣類・繊維品が輸出の大半を占める。 国旗 緑は農業とイスラームを、赤丸は独立時に流された人々の血を表す。	 <b>オランダ王国</b> 国語 ライン川下流に位置し、国土の多くを平野が占める。ヨーロッパの交通の要衝。交易と金融などによって栄える。 国旗 赤は多くの戦いにのぞんだ国民の勇気を、白は神の永遠の祝福を願う信仰心を、青は祖国への変わらぬ忠誠心を表す。

国旗とその国の概要 『標準高等地図』 p.147～154 より抜粋

同じ赤でも「太陽」と「血」の違い

『標準高等地図』は大判で地図が大きいのが魅力であるが、多くの国旗も掲載されている ( 図 )。扱っている国は108に及び、国旗の由来についての簡潔な解説が各国の概要と共に記されている。国旗は当然ながらそれぞれの国の歴史を反映しているが、色に対する共通イメージがあるかと思えば、同じ色でもまったく別の意味合いを持つ場合もあって興味深い。

例えば上半分が赤、下半分が白いインドネシアと、その上下が逆になったポーランドの国旗。配色は同じでも、インドネシアの国旗は「赤は自由と勇気を、白は正義と純潔を表す。また、同時に赤と白は太陽と月を表す」のに対して、ポーランドの方は「建国者が夕焼けの空を飛ぶ白鷺を見て旗にしたという伝説がある。赤は独立と国のために流された血、白は喜びを表す」とまったく異なる。赤が国の存立に命を賭けた人たちの血をイメージするものは少なくない。オーストリアの国旗(上から赤・白・赤)のように、白が敵の返り血を浴びなかったベルト部分を表すという凄絶な(せいぜつ)ものもある。

日本の「日の丸」はインドネシアの赤と同じ太陽の象徴だが、同じ赤い丸でもバングラデシュのものは「独立時に流された人々の血」で、地の緑は農業とイスラームの色という。そういえばサウジアラビアやパキスタンの国旗は緑と白だけが用いられている。かつてカダフィ大佐時代のリビアはワンポイントもない緑一色という世界一シンプルな国旗であった。これも現在では1969年までのリビア王国時代の三色旗に戻っている。上から赤・黒・緑で、中央の黒地にイスラームの白い三日月と星を配したものだ。この3色に白を加えたものが「汎アラブ

色」で、ヨルダン、クウェート、アラブ首長国連邦などの国旗にも用いられている。

「自由・平等・友愛」が青・白・赤ではない？

三色旗といえばフランスやイタリア、ドイツなど多くの国に該当するが、それぞれの色に意味を持たせているものも多い。フランスの3色は国の標語と結びつけて「青=自由、白=平等、赤=友愛(博愛)」との誤解が広まっているが、赤と青はもともとパリ市の色で、白はブルボン王家の白百合の標章がルーツだという。かつては青と赤の位置が左右逆だったこともあり、話はそう簡単ではない。20年ほど前に私は「住所システム」の取材で、パリ市街を区切るブルヴァール(大通り)からパサージュ(通り抜け小路)までを歩き回ったが、セーヌ川右岸にあるパリ市庁舎の石壁に「Liberté Égalité Fraternité (自由・平等・友愛)」の文字が彫りつけられているのを見て、妙に感激したものだ。

三色旗で由来が異色なのはロシアである。「オランダの国旗に感激したピョートル大帝が色を並べかえてつくったといわれる」とあるが、なるほどオランダ国旗の上段の赤を最下段へ移動するとロシア国旗だ(色は微妙に異なる)。由来には異説もあるそうだが、感激したとすれば大帝が20代でオランダに滞在していた頃だろう。当時の首都サンクトペテルブルクの都市名はドイツ語由来だが、第一次世界大戦ではドイツが敵国になったためにペトログラードというロシア語に改められ、後にレニングラードを経て旧に復した。国旗の方もソビエト連邦の誕生で鎌とハンマーを染め抜いた赤旗に替わり、その解体後は元の三色旗に戻ったが、ロシアが長らく西欧に向けていた視線の「複雑さ」は、現代にも影を落としているようだ。

いまお・けいすけ / 1959年生まれ。

出版社勤務を経て地図・地名分野の執筆を始める。著書に『地図帳の深読み』シリーズ(帝國書院)など多数。日本地図センター客員研究員。日本地図学会「地図と地名」専門部会主査。

